

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人
小羊学園

〒433-8105
静岡県浜松市北区三方原町 2709-12
電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707
E-mail kohitsuji@imix.or.jp
H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人
印刷所：聖隷サービス(有)
定 価：一部 30円

2010年7月20日
第 327 号

「和」協調と強調

法人本部事務局長
池谷 慎人

現在、南アフリカ共和国において世界最大のスポーツの祭典であるサッカーのワールドカップが開催されていますが、この号が皆様のお手元に届く頃には優勝国も決まり1ヶ月間にも亘る大会イベントも幕を閉じていることと思います。今大会の日本代表チーム(4大会連続4回出場)の躍進ぶりには正直驚かされ、ある種の強い感動を受けるとともに不可能を可能にしてしまうような勇気を貰った気分になりました。今となつては、個人的に1分け2敗の予選敗退と予想してしまつた自分が恥ずかしい限りです。

日本代表チーム躍進の理由は定かではありませんがマスメディア等を通して自分なりに感じたことはワールドカップ本大会前に比べると明らかにチームが一つに纏まりチームワークがとても良くなったことです。ベンチにいる控え選手の献身的態度と優しさ、チームスタッフの選手個々に対する気配り等々が垣間見られ、一言の言葉で表現すると、まさに「和」といふべきものを感じました。

「和」といふ言葉を漢和辞典で引いてみると【やわらぎ】【まとまった状

態】【なごむ】【あわせる】【おさめる】等という意味として書かれています。その意味だけを考えてみると「協調」というイメージが湧いてきます。しかし、その意味の中にはもう一つの「強調」というものが見え隠れしているように思えてなりません。

どのような場合でもチームというのは言うまでもなく人の集団であり、その中には様々な個性が存在し形成されています。集団(チーム)の中において自分というものを抑えてしまい主張もせず譲り合つてばかりでは纏まるものも纏まりませんし強固な集団(チーム)にも成り得ません。逆に自己中心的な捉え方ばかりして何でも自分がついていける強い主張ばかりでも纏まるどころか集団(チーム)はバラバラになるだけです。集団(チーム)として最たるものは個々の協調と強調であり両者のバランスが上手に取られ保たれることによつて「和」が生じてくるのではないのでしょうか。

対照的だったのがフランス代表チーム(4大会連続13回出場)でした。ワールドカップ出場の常連国でありながら何名かの選手が練習をボイコットしてみたり、チームスタッフが平然と選手に対して暴言を吐いたり、自分だけのことしか考えていない我が儘な選手がいたり個々の主張ばかりが強過ぎるしまい「和」を感じることなど全くと言ってよいほどなく、過去に優勝1

回、準優勝1回という強豪国であろうとも予選敗退という結末でした。

我々の仕事もそうかもしれません。利用者の方の支援であっても事務の部門であっても管理の部門であっても一人で行うということはなく必ず何人かの人が集まり集団(チーム)を形成しています。その中で一人ひとりが明確な役割を担い、その責任を果たしながらより良い仕事をしていくために個々が協調と強調を融合させ両者のバランスを取り保ちながら「和」というものを築き上げていくものだと思います。その築き上げているであろう「和」を第三者が感じ取ってくれた瞬間こそが本当に良い仕事が成されている時なのかも知れません。

社会福祉法人を取り巻く環境は全ての面において一昔前とは異なつた状況に置かれつつあります。その中でも特に経営的なセンスを求められる時代となり、たとえ老舗であろうとも経営状態が悪化し行き詰れば自然に淘汰されてしまいます。このような時だからこそ社会福祉法人小羊学園というチームに係わる全ての人達が一丸となり目標に向かい一人ひとりが「和」を築き上げていく努力をするべきではないのでしょうか。

もう既に次のゲームは始まっています。今から4年後(2014年ワールドカップブラジル大会)がとても楽しみです。

地域で生活すること

法人ケアホームプロジェクト会議を通して思うこと

支援センターわかぎ 副施設長 古橋 誠

小羊学園のあゆみから

社会福祉法人小羊学園が創設してきた社会福祉事業は、第1種社会福祉事業（入所施設）を基盤として運営されてきました。その後、社会的ニーズに応えるべく、小羊デイケアホームやマルカート、オリーブの樹、ぱびるすなど在宅障がい児・者の支援を拡充してきた経緯があります。

近年、日本の社会福祉事業は、ノーマリゼーションの理念の下、地域の中で、普通の人と同じ暮らしができるように推し進められてきています。小羊学園が設立された昭和40年代の障がい者政策は、障がいを持つ人を入所施設でお預かりし、家族と離れ、地域との接点が少ない環境である意味隔離的な施策であったことは否めません。小羊学園で受け入れてきた人たちは、当時の社会資源では地域での支援が難しく、西部地区はもとより伊豆地区から入所された方たちも複数名おられます。

時代が変遷し、平成の時代になり、ノーマリゼーションの理念が浸透して、法人もこの流れを受けながら、入所施設から居住の拠点を地域の中に置く試

みをしてきました。1990年に、最初の試みとして「のぞみの家」「めぐみの家」と呼ばれる職員宿舎の空き部屋を利用しながら、施設と「家」を行き来する生活がスタートしました。その後、平成14年に自活訓練事業を利用して、聖隷学園学生寮であった温心寮で本格的な地域生活が始まりました。平成16年には、グループホームの認可を受けて新しい歩みを始めました。その後、現在に至るまで「ひまわり」「ひだまり」「あゆみホーム」「カトレア」の拠点を整備し、今後も入所施設から小さな集団で小さな暮らしを提供すべく整備を進めようと計画しています。今年度には、カトレアの改築を控え、新たに5名の方が地域で生活する予定です。

では、小さな暮らしを地域の中で実践するとは、どんな意味があって、何を視점에勧めていくべきでしょうか、確認をしたいと思います。

大事にしたいこと

これまで、事業所単位でどういった暮らしをどのように創っていくのか、管理者・現場職員が互いの視点に基づ

いて話し合いはされてきましたが、地域生活へ移行する際の理念や支援のあり方を法人単位で検証したことはありませんでした。

昨年度、法人「ケアホーム推進プロジェクト」チームにおいて、幹となる理念の必要性を感じ、これまでの支援の課題整理と地域生活のあり方を検討し、今後の方向性や事業計画について検証しました。その中で、私たちが大事にすべきことは、

「障がいを持つ人たちが、住環境・活動場所等の生活拠点を地域の中に置き、いわゆる入所完結型での暮らしではなく、地域の人たちとの繋がりを大切に

し、より本人らしさが発揮できるように支援する、そのために、ご本人を中心において地域で支えあう仕組みを作る」ことだと考えました。

着眼点

では、具体的に何に着眼し、意識して進めるべきかを考えたいと思います。

1 「障害の程度にかかわらず、小さな暮らしを提供することで、環境を整え、より心の安定が図られるように」

小さな暮らしの単位では、大きな集団の中で起こりやすい対人関係のトラブルを回避しやすい面があります。少

カトレア改築図面
23年3月完成予定



人数で生活することにより、同居人や職員など特定の人と安定した関係性を持ちやすいと思われれます。また、空間が小さくなることで、構造化が図りやすく、空間の見通しを持って生活することが予測できます。

さらに、一人部屋など、自分の空間をもてることや居場所があること、逃げ場があることによる安心感・根本的な不安材料の解消が期待できます。



「ひだまり」で行われているおかし教室の1コマ

2 「選択肢・自由度の幅を広げること・当番やお手伝いなど役割を持ちつつ、ご本人の主体性やエンパワメントを高められるように」

ケアホームでは、食事や外出など生活の中で利用者が選択できる場面が増え、個別的な支援が入所施設と比較すると提供しやすい状況です。施設発想の利用者管理から、ある程度自由度

のある暮らしの提供が期待できます。もちろん、障がい程度の重い人々には、健康や生活などの部分で、どこまで管理すべきか議論をする必要はありますが、少しでも選択や自由度を高めることが、ご本人の主体性に繋がると考えます。その中で、支援計画に基づく、役割や期待されていることを明確にして、「自ら生活を組み立てる」と感じられる支援が重要です。また、意欲や興味を持ったことに対して、その可能性を見極め、彼らの想いを支え、生活意欲の向上が図られるように支えていきたいと思うのです。

3 「自治会活動への参加や役割を担い社会的なルールやモラルを経験し習得できるように、また地域の一員として責務が果たせられるように」

ケアホームの暮らしが、施設から離れた単なるミニ施設になっては意味がありません。彼らの生活環境に地域の方との交わりがあって、必要に応じて相互協力できることが大切だと思うのです。住宅街にケアホームがあっても、利用者がホームと通所施設の行き来で終えたら寂しい限りです。彼らが地域の一員として、地域における役割を持ち、地域の中で暮らしている実感を持てるように進めていかなければいけません。具体的には、近所付き合いを大切にする、お祭りや草刈りなどの自治会行事に積極的に参加すること、



「ひまわり」に入居されている6名の方々

買い物やお使いなどに利用者も参加すること等が考えられます。一般の人たちからしてみれば、これらは何も特別なことではありません。

しかし、障がいを持つ人たちが、小さいながらも共同住宅に暮らし、地域で生活するには、一緒に同じ地域で暮らす人たちの理解と受容が必要です。これまでも、地元自治会に反対されてケアホーム設置を断念したという事例を何件か聞いています。地元の人からしてみれば、「怖い」「何をするか分からない」と不安感が拭えず、拒否的になることも分かります。ただ、実際お付き合いをしてみれば、持っていた不安感を払拭できた事例も多くあります。まずは、「互いを知る」ことが何よりだと思うのです。

そのために、管理者・支援員ともに役割があります。管理者は、予め候補地の土壌を耕す作業が必要でしょう。早い段階で、自治会をはじめ、近隣住民に説明を行い、安心してもらえる配慮が重要です。支援者は、彼らと共に地域へ出かけ、住民に障がいのある方を肌で感じとってもらう役割があります。大きな視点で考えると、ケアホームの実践自体が、福祉啓発であるとも言えるのです。

4 「日中活動場所との職住分離により、生活の幅の広がりや、メリハリのある生活が出来るように」

地域で暮らすには、居住支援としてケアホームがありますが、日中に活動できる場所の確保も必要となります。小羊学園でお預かりしている多くの方は、重い障がいをお持ちの方なので、就労という域には達しません。ほぼ全員の方が、生活介護事業を利用して

います。落ち着ける生活空間のケアホーム、本人なりに頑張れる活動がある生活介護事業所があることによって、対人関係の広がりや、生活の幅の広がりが期待できます。また、平日と週末の生活リズムの違いがより明確になり、活動日と休日が明確になります。「家」と「職場」があって、息抜ける場所と頑張れる場所があることは、生活の中で大きな要素を占めると考えるのです。

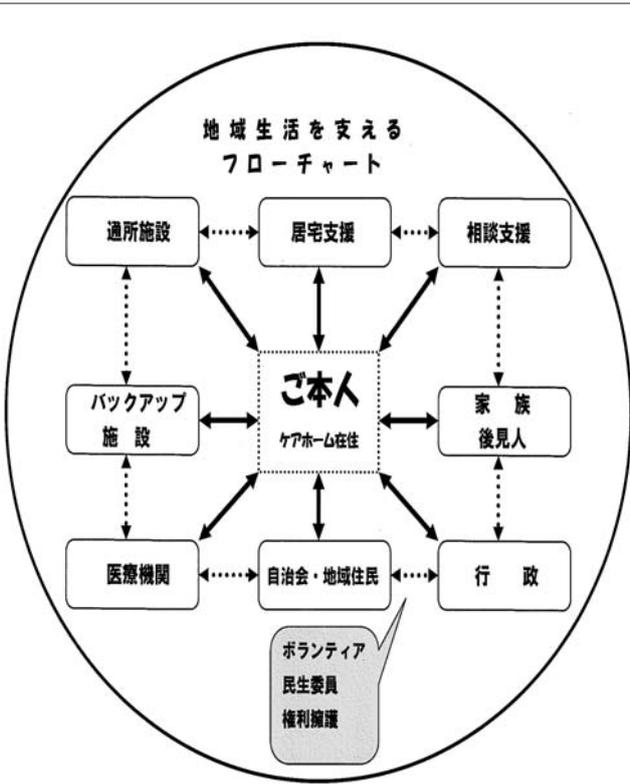
地域で暮らす仕組みづくり

実際に地域で生活していく中で、様々な課題に直面することはこれまで多々あったに違いありません。現在、法人の地域生活を支える仕組みは、各事業所の支援員が会議で議論し、管理者が課題解決を図り、難しい場合はバックアップ施設と呼ばれる入所施設がカバーする仕組みです。当然、自事業所のみでの解決に限界があることは否めません。課題やニーズを当該事業所で完結せず、相談支援事業所を核におき、地域の中にある社会資源やボランティア、民生委員などにも協力を仰ぎながら、

個々に必要な支援体制を構築していくことが、地域で生活しているという実感に繋がると思うのです。

おわりに

時代変遷に伴い、ニーズが多様化し、ニーズにあった新しい理念が生まれ、法制度も改正されていますが、「地域で生活する」にあたり、福祉サービスの枠を超えた地域の再生が必要だと感じています。よく稲松理事長が口にされる、インクルージョンの発想を持ち、地域の課題を地域で解決していくシステム作りが、彼らを「地域で生活する」ことの大きなキーになると思うのです。



※ これらの機関がそれぞれの役割を分担し、ご本人のニーズに即した支援を展開できるかどうか大きな鍵となる。

— 小羊写真集 ⑩ —
東の間の休息

当時の労働環境は、現代社会からしてみればかなり厳しい環境。多くの時間を業務に費やしながら、子どもたちの成長を育まれた先輩職員。仕事を終えてから、ほっと一息ついてテレビを鑑賞し、また明日への活力をつけられたことでしょう。



編集後記

毎年、この時期は特別支援学校に通学する保護者にとって、大きな悩みを抱える頃です。1ヶ月に及ぶ夏休みをどう乗り越えようかと。放課後支援事業所や児童デイサービス事業所が受け皿となっていますが、全体的なキャパシティはまだ少ないのが実情です。昨年度、実施されなかった、特別支援学校を会場にした余暇支援プログラムが、今年は、新たな展開で開催されることになり、そこに市民との協働が図られることになったことは、喜ばしい限りです。地域の協力が増えて、地域の中で子どもを支える仕組みが増えていくことを願ってやみません。本格的な暑さ到来です。くれぐれもお身体ご自愛下さい。(F)

小羊学園を支える会

2010年度寄付金報告

6月受付分 209,000円 (21件)
累計 1,023,903円 (83件)

小羊学園への寄付金振込み先

(口座名義)「小羊学園を支える会」
郵便振替口座 00890-4-45415
りそな銀行浜松支店 (普通) 040005
静岡銀行細江支店 (普通) 043483

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りします。下記へご連絡ください。

小羊学園を支える会事務局 (鈴木)
三方原スクエア内 ☎053-414-1833